

万斛の苦悶に出会う―「近代」をめぐる私的断想

玉置 文弥

■経験から感じたもの―「近代」の「重さ」

分かりやすく整理するのがそういった類の本の役割であるのは百も承知なのだが、教科書や概説書には、例えば近代という時代が類型的かつ順序よく書かれていて、現在の人間がその時代はそんなものだろうと思うきつかけとなっているのではないかとすら思われる。

このような言い方はしかし、紋切り型である。それでもあえてなぜそのようなことを書いてみたかというところ、僕自身の最近の経験による。講義をするという必要から「文学」なるものを、これまでと比較してよく読むことになったのである。殊に近代日本を舞台としたものが多い。

多くの近代文学にはその時代における人々の苦悶が、

ありありと描かれている。しかし、先に言った教科書的記述に対する僕自身の感想は、その記述自身のことよりも（むしろ記述に問題がないわけではないが）、それを読んだ人々が例えば近代の人々の様々な苦悶をどこまで考え、想像できるのか、という点にかかっているものである。残念ながら、日本においてその力は極めて貧困な状態にあるのではないかと言わざるを得ない。これもまたしかし、紋切り型の感想である。

ところが、僕のまじしい経験ではあるものの、そういった状態はいわゆる大学を含めた教育の現場だけでなく、アカデミアの世界にも共通しているように思われる。もちろん様々な研究者がいる。したがって、みながそうであるわけではないし、実際に尊敬する先達も数多くいる。しかし、軽率な感想と言われればそれまでなのだが、重

みが無いのではないか、そう感じてしまう。僕の偏見だろうか。

「重み」と言う言葉は曖昧だが、僕の言いたいののは、近代はもつとどす黒く、鬱々そして闇のような世界であるということだ。近代について司馬遼太郎は、

維新後、日露戦争までという三〇余年は、文化史的にも精神史のうえからでも、ながい日本歴史のなかでじつに特異である。

これほど楽天的な時代はない。

むろん、見方によってはそうではない。庶民は重税にあえぎ、国権はあくまで重く民権はあくまで軽く、足尾の鋳毒事件があり女工哀史があり小作争議がありで、そのような被害意識のなからみればこれほど暗い時代はないであろう。しかし、被害意識でのみみるのが庶民の歴史ではない（司馬、一九七八、二九五―二九六頁）。

と書いている。こうした見方をその言葉通り受け取るな

らば、僕は基本的にはそうであるべきと考える。暗さをいたずらに強調して、近代日本のある種の宿命―近代・欧米という圧倒的圧力との衝撃的邂逅―を無視し、戦前の日本が行った対内外への行動すべてが悪であった、というような盲目的な議論には全くくみできない。僕は、そういった見方は、実は近代日本の苦悶を引き受けていない、それはあなた方が見たい近代日本像を押し付けているだけである、とすら考える。

さて司馬は、明治を「これほど暗い時代はないであろう」としつつ、「被害意識でのみみることを批判して、「楽天的な時代」としてその時代を見ることを肯定している。被害と楽天。なるほどわかりやすくはある。しかし、その間の葛藤はどうなっているのだろうか。これもよく言われることなのだろうが、歴史における光と闇は、別個に分離されたものではない。つながっているどころか、時代というコインの裏表になっている。僕がこの小文で注目したいのは、その光と闇が痛々しいほどに葛藤しいながら、「ほんやりとした不安」が人々を離さなかったという意味での暗い時代、すなわち「近代」なのである。

だからといって、それは重大な歴史的事件、例えばある戦争のある時点のみのことを言いたいのではなく、日本の近代の深層にあると考えられる無名の人々の、数多の、否はかりきれない万斛の苦悶を意識したいのだ。

そのような「近代」を現在引き受けるということは、言うは易く行うは難しであって、易しくないどころか、ほとんど無理である。しかし、例えばアカデミアの世界においては、動機、対象、分析、証明、類型、結論、論理的の一貫性……といった自明視されている石礫で、その苦悶を洗い流してしまっていると思う。しかしこの言葉はそのまま僕自身に突き刺さる。お前こそそうなのではないか、と。たぶんそうなのかもしれない。アカデミアの世界に住している限りにおいては。それはやむを得ないことではあるとも思う。しかし、口幅つたいが、それで開き直って仕様がでないじゃないかというほどには利口でない。それは謙遜でも皮肉でもなく、僕自身がその葛藤の場所に居続けようとする構えを意味する、などと思う。だからなのか、多くの近代を扱う特に歴史学の発表を聞いたたり、論文を読むと、偉そうにも「そんなも

のじゃない」という感慨が生まれてしまう時があるのだ。

■人々の「悪魔ごころ」——高橋和巳『邪宗門』から

どうも稚拙な文章ながら、感情が先行し過ぎた。この小文でそのような歴史の光と闇の葛藤とか苦悶といった大きな問いを論ずることなどできるはずもないのだ。ただ、遅ればせながら若干経験をした文学(的視点)から歴史を見るという行為は、どうも僕がこれまでに何となく掴んできたような近代イメージを、少しずつ、それについて着実に突き崩しつつあるらしい、というそのことを、ここに記し、分かち合いたいのだ。

「文学」分析とは縁遠い取り上げ方かもしれないが、例えば昭和戦前期の暗さ、もつと言えば人々の心理的な暗さが、高橋和巳の著名な小説『邪宗門』には克明に刻まれている。物語を追う余裕は無いが、この小説の冒頭、どこからともなくやってきた少年「潔」が「神部」なる架空の京都の田舎駅に降り立ち、架空の教団「ひのもと救霊会」を目指して駅前のアーケードを歩く場面がある。

時期は一九三二年。日本が世界恐慌・昭和恐慌から抜け出せなかった、そして満洲事変の年である。人々の暗さは、悲しみと言うよりも憎しみに転化していた。

「またひとり乞食が帰ってきた」

どこで盗んだのか、泥まみれの生大根を齧りながら歩く少年の姿を見ても、人々はさほど特別な反応をしめさなかった。

「ちえつ、縁起でもない」夢遊病者のように店先に立ち止まった少年を見て、果物やの店主はやけにはたきかけながら舌うちした。「たまに店をのぞくから誰かと思つたら、乞食や」

「でもまあ、門前町の神具店よりはましさ」乳飲み子をあやしながら女房が言った。「門前町は、救霊会あつての門前町だからね。教主さんはどんな偉い人かは知らんけれど、女をたぶらかしたり、お国に背くようなことを言つたりしておとりつぶしになつては、もうおしまいだよ」

「悪いことは重なりやがるからな。今にこの町は、

乞食だらけになるよ」と店主が言った。

少年は果物屋の前で、買手もつかぬまま埃をかぶつた栗やりんごや柿の山を見ながら、ふいに涙をながした。店番に退屈していた店主が、そばにいた番犬を少年にけしかけた。けしかけられた犬ははげしく吠えながら少年に襲いかかつていった。少年は逃げる力もないように棒立ちの姿勢のまま、店さきの果物を見ている。

「ケン！かまへん、噛んでやれ！」と店主は言った
(高橋、二〇一四、一三一—一四頁)。

生大根を齧る乞食の少年と、犬に彼を噛ませようとする店主。ここに明るさはない。一片の明るさもない。人々にとつて、ぼんやりとした不安はずでに激しい憎しみであつた。人を思いやるとか助けあうということとはかけらも出て来ない。ただどうにもならない現実に対する鬱憤を、犬の牙に託すほかなかったのだ。この時代は、暗いというよりもはや窒息状態であつたのだろう。

それを「解決」する手段が、帝国陸軍の一部の軍人に

とつては、満洲事変から「満洲国」建国へ至る「時代離れのした大芝居」（宮崎、二〇一五、三〇三頁）だったのだ。その演出は、果して功を奏した。人々は「満洲国」を熱狂的に支持した。それは、つとに有名な一九三三年の「連盟脱退」の演説をし、「失敗をして『日本へ』かへつた」（萩原、一九四一、一一二頁）と考えていた松岡洋右をして、

口で非常時をいひ乍ら、私をこんなに歓迎するとは、皆の頭がどうかしてゐやしないか。これは皆虚名である（萩原、一九四一、一一二頁）。

と呟かしめるほどのものであった。そうした熱狂の裏面には、抜け出せない窒息状態の日本社会の状況が張り付き、排除と差別をさらに加速させ、やがて殺戮・戦争へと駆り立てていく。

先の『邪宗門』に登場する「ひのもと救霊会」は一九三二年に政府から不敬罪などを理由に弾圧され、マスメディアから徹底的な罵詈雑言を浴びることとなるが（一九三五年の大本教の第二次大本事件がモチーフ）、そ

の教団内での「再建会議」の場面では、豊作・凶作飢饉による農村の崩壊、農家の子女の身売り、都市にあふれる失業者、思想弾圧、テロといったほとんど出口の無い日本社会の状況が、ある幹部の口から語られる。そして、その話を受けた他の幹部は次のような、印象的な言葉を口にする。

救霊会が、まだ比較的に微力であるため、社会不安におののく民衆の気をそらせ、他人の禍を喜ぶ悪魔ごころを煽る、その生贄に選ばれたのだという気が私もしておりました。そうでなければ、政府や官憲の言いなりになる新聞や雑誌のすべてが、こんなに興味本位な煽り方をするはずがありません（高橋、二〇一四、七三頁）。

政府の弾圧はいまや教団個別の問題を越えて、人心の「悪魔ごころ」を誘い、社会不安から気をそらせるためのものであった。人々は、まるでルクレティウスの詩のように、「他人の禍を喜んだのかもしれない」。

楽しいことだ、大海のおもてを嵐がふきまくる時
陸地にたつて他の人の大きな難儀を眺めることは。

人の苦しみが楽しい悦びだからというのではなく、
わが身がどんな禍を免れているかを知るのが楽しい
のだ（ルクレティウス、一九六五、三二―三頁）。

この感情は普遍的であり、近代に限られるものではない。
では、それがやはりそのように存在していた近代と
は、何なのか。何がそれまでと違うのか。「悪魔^{マコ}ころ」
の生まれる原因が違うのか。そしてそれが武器によつて
人を大量に殺す戦争をも引き起こしていくことが違うの
か。

アカデミアの世界で、「そんなものじゃない」と息巻
いていた僕もまた今、「ぼんやりとした不安」の中において、
やはり分からない。そして、近代というものが、人々の
万斛の苦悶に満ちていたどす黒い時代であったというこ
とに本格的に気づかされたのは、他ならぬ「文学」の虚
構化の力であった、という、凡百の感慨めいたものに小
文の結びを持つてくるほかないほど、たじろいでもいる。

そういう迷いを洗い流すことだけはしないと、そのこと
を頼りにしながら。

【参考文献】

- 司馬遼太郎（一九七八）『坂の上の雲』八、文春文庫
高橋和巳（二〇一四）『邪宗門』上巻、河出書房新社
萩原新生（一九四一）『世紀の英雄―松岡洋右』牧書房
宮崎市定（二〇一五）『中国史』下巻、岩波文庫
ルクレティウス著、藤沢令夫・岩田義一訳（一九六五）
『事物の本性について―宇宙論』『世界古典文学全集（ウェ
ルギリウス ルクレティウス）』二二巻、筑摩書房